慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	批判的社会理論としての役割理論に向けて
Sub Title	Zur Rekonstruktion der Rollentheorie als eine kritische Gesellschaftstheorie
Author	岡原, 正幸(Okahara, Masayuki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1983
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.23 (1983.) ,p.39- 47
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000023-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批判的社会理論としての役割理論に向けて

Zur Rekonstruktion der Rollentheorie als eine kritische Gesellschaftstheorie

岡　原　正　幸
Masayuki Okahara

Die bisherigen rollentheoretischen Konzeptionen in der Soziologie sind konservativ und für den Status quo. Sie sind unfähig, Machtphänomene beim Rollenspielen beschreibend und erklärend zu begreifen. Es ist also meine Absicht, mit Hilfe der "Machtrolle", die zweierlei Machtprobleme thematisieren kann, einen Beitrag zur Überwindung solcher Kritik an den Rollentheorien zu leisten.

Folgenderweise ist diese Absicht Schritt für Schritt erreicht.

1. Einleitung: die von den Rollentheorien vernachlässigten zwei "Machtprobleme."
2. "Homo sociologicus" und "Dahrendorf-Diskussion".
3. Dahrendorfs "Problematik" als eine Aufgabe.
4. "Macht" in der Rollentheorie und "Machtrolle".
5. Schlußbemerkung: "Machtrolle" als eine Lösung.

1958年 "Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie" 誌に二回にわたり掲載された，Ralf Dahrendorf の論文 "Homo Sociologicus"[1] は，西ドイツ社会学界に役割理論を初めて紹介したという意義を担うとともに，「役割」に関する一連の論争を引き起こす引き金でもあった。本稿では，まずこの論争 (Dahrendorf-Diskussion[2]) における Dahrendorf 批判を土台にして，homo sociologicus という理論的構成体に内在する「問題性」，すなわち Dahrendorf の社会思想とも呼べるものを明らかにする。次に，それを個別具体的な問題を孕んだ社会的相互作用の役割分析に役立つように，概念化する。その際，Dieter Claessens が提案した「権力役割 (Machtrolle)」概念を応用修正しつつ有効に用いたいと考えている。

従来，役割理論といえば Ralph Linton から Talcott Parsons を通して展開された構造機能主義（以下 SF と略記）モデルと，George H. Mead から Ralph H. Turner を通して展開されたシンボリック相互作用主義（以下SI と略記）モデルの両者を代表的な二つの潮流として論ずるのが一般的である[3]。この二つの対立的潮流の双方に対して様々な批判がなされており[4]，分析枠組として一長一短である[5]。

これらすべての批判に向けて，有効な解答を提出することは，ここでの目的ではない。従って，本稿では，双方の役割理論に対して共通に浴びせられる批判，すなわち，それが現状維持的保守的性格を持つという批判[6] に限定し，それを正面に据えたいと思う。

日常的な社会的相互作用が個別具体的な（社会）問題を孕んでいる場合，概念操作による一般的な記述や説明とともに，問題の特殊性の具体的な記述や説明が，社会学に要求されるだろう。そして，この課題を果すことが，問題の認識と解決をめざす批判的社会理論の使命である。しかしながら，従来の役割理論がこの課題を十分に果しているとはいえない。なぜなら，Dahrendorf の「問題性」に対する無自覚と現状維持的保守的性格が，批判的社会理論としての分析視角を閉ざしてしまうからである。従って，役割分析が批判的社会理論として効果的に行なわれるためには，Dahrendorf の「問題性」の

自覚と現状維持的保守的性格だという批判の克服が，役割理論にとって不可欠である。

ところで，従来の役割理論のどこにその様な批判を受けてしまう原因があるのだろうか。私見によれば，その原因は，従来の役割理論において以下の二つの権力問題が十分理論的に主題化されない点にある。

二つの権力問題とは以下の通りである。

「マクロ権力問題」＝歴史的相対的な集合体としての社会システムによって形成される権力関係の概念的把握。

システム変革を説明できず，それゆえシステムそれ自体の特殊性を相対化できない SF [7] と，構造的視野を欠き，所与の規定された役割の取得から理論構築を行う SI が，マクロ権力問題に関して無力であることは明白であろう。さらに，この無力から「役割」というカテゴリーの普遍的一般化が生じ，その場合には，「歴史的に制約された役割分析が，歴史的発展としての社会発展を無視してしまうのである。」[8]

「ミクロ権力問題」＝個別具体的な社会的相互作用の形成に影響を及ぼしている日常的権力関係の概念的把握。

具体的行為ではなく，社会的地位に結合した規範的役割期待を分析対象とする SF と，主観主義，ソリプシズムによってユートピア的相互作用状況を仮定的に構成する SI [9] が，ミクロ権力問題に対して有効な概念装置を提供できないことは明白であろう。

従って，本稿の最終的課題は，「権力役割」概念を導入，改良することにより，従来の役割理論に，上記の二つの権力問題に対して有効な分析視角を提供することである。

これらの作業を通じて，役割理論は批判的社会理論として再構成されるだろう。

"Homo Sociologicus" を提唱した Dahrendorf に対する諸批判と，そこから析出される社会批判の契機となる「問題性」を説明するに先立って，彼が概念化した homo sociologicus が，意味するところを整理しておくことは，有益であろうと思う[10]。

Homo sociologicus とは，人間を（社会的）役割の担い手として把握する理論的構成体である。役割とは，あるひとつの（社会的）位置の占有者に向けられる，原理的に個人から独立した規範的行為期待の束として理解される。その期待は，相互の位置が構造的に関係づけられている際に，それらの位置を占有する一方の個人あるいは集団から，他方の個人あるいは集団へ向けられている。さらに，外的行為に対してのみでなく，内的態度や性格に対しても期待は向けられる。これらの期待が形成される地盤として Dahrendorf は，個人でも全体社会でもなく，準拠集団を重視している。一方，行為者に向けられる諸期待の衝突から生ずる役割葛藤は，「役割内葛藤 (intra-role conflict)」と「役割間葛藤 (inter-role conflict)」の二つに分類されている。役割内葛藤とは，一つの位置に対して向けられる複数の準拠集団からの期待が相互に矛盾している場合であり，役割間葛藤とは，一個人が同時に占有している複数の位置に対しての期待が相互に矛盾している場合である。

社会的位置の占有者に向けられる期待が規範性を帯びるのは，期待に適合的な行為を強制するための圧力手段，すなわち（肯定的および否定的）サンクションを，各々の準拠集団が行為者に対して行使できるからである。行使されるサンクションの程度を規定する役割期待を，Dahrendorf は三つに分類している。「強制期待 (Muß-Erwartung)」，「義務期待 (Soll-Erwartung)」，「可能期待 (Kann-Erwartung)」がそれである。強制期待とは，その期待が法や司法制度等によって支持されている場合であり，義務期待とは，その期待が道徳や因襲によって支持されている場合である。可能期待とは，その期待がもっぱら尊敬や社会的承認といった肯定的サンクションによって支持されている場合である。この分類は，彼によれば，制度化の程度とともに個人や社会にとっての役割の重要性の程度をも，明らかにする機能を持っている。

以上が，Dahrendorf の役割理論の概要である。この homo sociologicus モデルを純理論的に受容し，社会学的分析概念として積極的に評価する立場が存在している[11]。しかしながら，この様な立場は，Dahrendorf の真意を汲まず社会思想としての "Homo Sociologicus" を無視していると言わざるをえない。そこで次に，彼の真意を正当に理解して，それを議論の対象に据えた Dahrendorf-Diskussion における各論者の批判を整理してみよう。そうすることによって，社会思想家としての Dahrendorf の姿と彼の思想の中核を成す「問題性」が，浮彫りにされることと思う。

Frigga Haug の批判は，西欧マルクス主義による役割理論攻撃の一つの典型と言えるだろう。彼女の射程には役割理論一般が含まれているが，主たる攻撃対象は Dahrendorf モデルに絞られている。

まずHaugは，役割理論を演劇メタファーの一変種と規定し，ちょうど16CにShakespeareを代表として，世界や人間を舞台や俳優といったメタファーで表現する世界観が隆盛したのと同様に，20Cの今日「社会に関する科学の構成的根本原理」[12]として演劇メタファーたる役割理論が脚光を浴びているのだ，と主張する。そして両方の時代に共通することは，その時代が社会の大きな転換期であり，没落する階級と台頭する階級が一層明白になった時代であるという点だ，と言う[13]。すなわち，今日の役割理論とは，市民階級が自己の価値体系の脆弱さを意識した結果，形成されてきたものであり，すぐれてブルジョワ的性格を持つのである。

他方，Dahrendorfの役割概念にとって必然的な，個人と社会の分離という前提は，人間本質を社会的存在とみなしたKarl Marxの人間観，社会観と相入れないものである。そして「社会の関心は，個人的資質の十全たる展開を促進することよりも，個人が彼の充足すべき社会的課題に効果的，能率的に応答できるよう，心構えを形成していくことにある。」[14]というDahrendorfの主張の中で，個人と社会は二律背反的に分離されてしまっている。この点をHaugは攻撃するのである[15]。

Helmuth Plessnerは，個人と社会の二分法を受容しつつも，Dahrendorfの様にどちらか一方に比重を置こうとはしない。Plessnerによれば，社会とは，役割というカテゴリーによって把握されるべき規範体系の下で行なわれる諸個人の共同作業に他ならない。それゆえ，個人が社会的に妥当な活動を行なう際に用いる関節(Gelenk)を，役割概念が指示していることになる[16]。「人間が自己の独自性を見い出す場はすべて，彼が自分自身あるいは他人の前で演じている役割にすぎないのである。」[17] この様に，個人と社会の間に対立的矛盾を見ないPlessnerは，Dahrendorfを次の理由によって批判する。すなわち，Dahrendorfが役割行動を人間疎外の一形態としてのみ認識してしまい，役割行動における外化(Entäußerung)という人間にとっての本質的活動を，疎外(Entfremdung)という非本質的現象と混同してしまっているという理由である。「外化が意味するのは，人間の自己疎外ではなく，人間が自分自身でありうるチャンスなのである。」[18]

「制度」を人間にとって本能代行的な負担免除(Entlastung)機能として理解するArnold Gehlenにとって，役割は同機能を果す重要な一制度として登場する。従って，役割を非人間的だとして非難するDahrendorfに対する彼の批判は厳しい。Gehlenは，Dahrendorfが用いた「自由で，自律的な個人(freie, autonome Individuen)」や「疎外された人間(der entfremdete Mensch)」といった概念は，社会学的概念ではなく，政治的なものであると批判する。そして，Dahrendorfが「人間は，行為において，前もって形成されたそれゆえ計算可能で統制しうる社会的存在なのだろうか，あるいは自律性や自由への能力を持った一回限りの存在なのだろうか」[19]といった非科学的設問を行う以上，彼のhomo sociologicusは，「偽装されたhomo politicus orientalis(政治志向人間)」にすぎないと批判している[20]。

Friedrich Tenbruckは，"Homo Sociologicus"に対して最初の綿密な体系的批判を試みている。彼の立場はSFのそれであり，従って，Parsonsからの偏向としてDahrendorfへの批判がなされている。数ある論点の中でここで注意すべきことは，次の発言の中に明瞭に示されている。「社会的役割は，サンクションを通して要求されることの範囲を根本的に越え出ている。それゆえに，人間行為の役割性(Rollenhaftigkeit)は，行為の個人的自発性と原理的に一致している。」[21] すなわち，Tenbruckは，homo sociologicusという強制され疎外された受動的行為者モデルに対して，「制度的統合の定理」を手引にして，役割へ自発的能動的に参与する行為者モデルを対置したと言えるだろう。

それでは，以上四人のDahrendorf批判を通して浮彫りにされた「問題性」(それは，我が国におけるhomo sociologicus受容の没批判的一面性を鋭く指摘すると思われる)を，より深く検討してみよう。

Dahrendorf批判の対象となったこの「問題性」は，決して無意識の過誤の産物ではない。むしろそれは，彼がhomo sociologicusという理論構成体の中に積極的に反映させた彼の問題意識であり社会批判の要請なのであった。この点を再確認するためにも，彼の発言のいくつかを直接引用することから始めよう。

「社会学は，社会という怒るべき事実(ärgerliche Tatsache)に直面した人間と関らねばならない。」[22]

「社会とは，個々人の疎外された形態である。そして，homo sociologicusとは，本来の所有者から走り去り，その所有者の主人として戻って来る様な影なのである。」[23]

「人間は，一回限りの存在から標本に，個人から集団構成員に，自由で自律的な創造者から疎外された特性の生産物に，なってしまった。」[24]

分析的記述的ではなく，この様な道徳的倫理的な言明

を随所で展開するDahrendorfは，個人と社会の関係性を，以下の様に理解していたと言えるだろう。すなわち，社会とは，現実（期待や役割）を規定し，それをサンクションに裏づけられた規範性によって，個人に対して強制する怒るべき事実なのであり，個人とは，その社会からの強制によって自己の自由，自律性，絶対的個性を剝奪され，疎外された状況に陥れられた存在なのである。

Homo sociologicus概念を使って認識された社会的行為の中に，自己実現の契機は見い出されない。社会化過程とは，絶対的個性が統制によって消滅していく脱人格化 (Entpersönlichung) の過程に等しい[25]。この様な社会観や道徳的政治的価値判断は，彼の役割理論を背後から支えるものであった。そのことは，例えば，根本概念である社会的役割の三つのメルクマールの中に，あるいは否定的サンクションを基点とする概念構成の中に，顕著に示されている。

社会的役割のメルクマールとして，1)準客観的で個人から原理的に独立した行為規定の複合体，2)個人ではなく社会によって規定され変更される内容，3)行為期待に伴う拘束性と不履行の際の行為者に対する不利益，が挙げられている[26]。このメルクマール規定の中に，個人に対して外在的，拘束的に存在する社会と社会に参入することにより自由を剝奪される個人という構図が，容易に析出されるだろう。

一方，Dahrendorf はサンクションを肯定的と否定的の二つに分類しているが，期待の規範性を保証するものとして重視されているのは後者である[27]。従って，彼にとって役割行為者とは，否定的サンクションが自分に対して行使されるのを避けんがために，罰を恐れんがために，役割期待に従って行為する存在であり，決して自発的な行為主体ではない。それは，否定的サンクションの最小化を唯一の動機とする行為主体であり，それゆえ行為者に対して課せられる役割はすべて強制的抑圧的色彩を帯びることになる。

Homo sociologicus というモデルの背景にあるDahrendorf の「問題性」を整理すれば以下の様になるだろう。それは，社会が，サンクションに裏づけられた規範的役割期待を個人に強制することを通して，個人が，自己の本性の自由で自発的な展開を阻止され抑圧され，疎外されているという認識，並びにその疎外状況からの人間解放の要請である[28]。

この「問題性」を織り込んだ "Homo Sociologicus" に対する批判はすでに述べた通りである。これらを再度吟味するまでもなく，Dahrendorf の思想の一面性は明白であり，正当な批判はなされるべきだろう。しかしここで私が注目したいのは，この一面性によって，一層明確に成りえた「問題性」が，役割理論にとって果しうる意義である。それは正に，役割理論が現状維持的保守的だという批判を克服し，社会批判的視角を獲得するための有効な糸口になるということである。

この課題を果すためには，Dahrendorf によって超歴史的普遍的な疎外従属関係として定式化された「問題性」の形而上学的限界を越え，それを具体的な社会現象の役割分析に活用できる様に概念化する作業が，次の段階として必要とされるだろう。

この作業を本稿では権力にスポットを当てて行なおうと思う。なぜなら，Dahrendorf の「問題性」を様々な具体的領域で展開させる際に有効な包括的概念が権力概念であり[29]，且つ本稿の最終的課題である二つの権力問題への展開を権力概念が容易にするからである。

「役割理論は社会システムの機能を説明するための一理論になってしまった。そこでは，役割理論が権力という観点を排除し権力役割を完全に見過ごしてしまう，ということが前提になってしまっていた。権力問題をこの様に排除することは，権力の隠蔽あるいは権力地位の保持という機能以外の何物でもない。」[30] この様に述べ，従来の役割理論のイデオロギー性を批判する Claessens は，Max Weber の古典的定義（「権力は，社会関係のなかで抵抗に逆らっても自己の意志を貫徹するすべてのチャンス—このチャンスが何にもとづこうとも—を意味する」[31]）を用いて，役割概念のなかに権力モメントを導入する。すなわち，彼によれば，権力とは，行為者相互の役割期待を他者の抵抗に逆らっても自律的に規定できるというチャンスを意味する[32]。

行為者間の相互役割期待とその相補性に基づいて，創発的に形成され制度化されるという葛藤なきユートピア的な社会的相互作用モデルは，権力が介在する場合には，その限界を明らかにする。その限界とは，相互作用に参与する一方の行為者が独占的にその相互作用を規定していく姿を，説明できないことである。留意すべきことだが，相互作用の独占的規定のなかには，新しく定義しなおすという側面とともに，自己の役割を他者の変革願望に対して維持するという側面も含まれている[33]。

権力を扱う際に，Claessens は，地位に伴う制度化された権力や，価値，規範，役割等の体系にとって機能的な権力のみを対象としているのではなく，社会的分業と

それに基づく地位体系や，価値，規範，役割等の体系の形成にとって規定的な影響力を持つ制度化されていない事実的権力をも対象としている。この様な包括的な権力現象を射程に収めるため，Claessens は権力の様式を三つに分類している。

「システムによる権力 (die Macht durch das System)」＝特定地位に付与された制度的権力。

「システム内部の権力 (die Macht im System)」＝制度的権力の拡大を志向する権力。

「システムを越える権力 (die Macht über das System)」＝システム変革を志向する権力[34]。

以上三つの権力様式の内，最初の権力様式に関しては，SF の概念枠組も有効である。しかし，残り二つの権力様式は SF の枠組からは原理的に排除されてしまう。なぜなら各権力様式に含まれている「拡大」あるいは「変革」というモメントが，規範的カテゴリーのみでは分析しえない，役割期待の再規定を意味するからである。そこで，これらの権力現象を役割理論の対象として分析する目的で，Claessens は「権力役割」概念を考案した。

権力役割を担うということは，「他者の役割期待を 1）規定（あるいは維持）できる，そして（それだけでは単に一時的な権力にすぎないので），2）その役割期待を制度化できる」ということを意味している[35]。この権力役割という概念の問題点と限界については後述するが，ここではその有益性を見るために，Dahrendorf の「問題性」をこの概念を用いて説明してみよう。

Homo sociologicus モデルでは，役割行動は，行為者への役割期待の一方的強制を通して，本来的個人の抑圧や疎外と等置されていた。一方，それに対するアンチテーゼとして提出されたTenbruck のモデルでは，役割行動は，行為者の役割期待への自発的同調を通して，人間本質の自明性と等置されていた。一方においては自由なき強制という，他方においては強制なき自由という，社会的世界がモデル化されたのである。

「権力役割」概念を導入することによって，両モデルが具体化され架橋される可能性が開ける。すなわち，役割関係にある行為者の内，一方が権力役割を担い，他方がそうではないという場合を想定することによってである。権力役割を担う行為者にとっては，他者に対する役割期待やその充足を強制するためのサンクション等，役割関係の状況を主体的に規定できるため，抑圧や疎外感の契機を含まない役割行動が現出するだろう。他方，権力役割を担いえない行為者にとっては，彼の充足すべき役割期待は他者によって規定され，サンクションを手段として強制された期待であるため，自発的な自己実現の契機を含まない疎外された役割行動が現出するだろう。

Dahrendorf が普遍的に措定してしまった，役割行動における強制従属関係は，権力役割を導入することによって，再び具体的な社会関係となり，具体的な権力関係として役割分析の対象となるのである。

それでは，権力役割とは，一体如何なる「役割」なのだろうか。Claessens の定義では，不明確な部分が多い。しかし，彼の言明を総合すると，次の様に言えるだろう。権力役割とは，役割期待のなかに内在化された規範的制度的権力（システムによる権力，主に当該役割関係の維持に関与する）と，役割関係が定義される過程において作用する事実的権力（システム内部の権力，システムを越える権力）の二種類の権力を内包する概念である。従って，権力役割を，役割期待の束として把握される「役割」としてではなく，むしろこれらの役割（ある

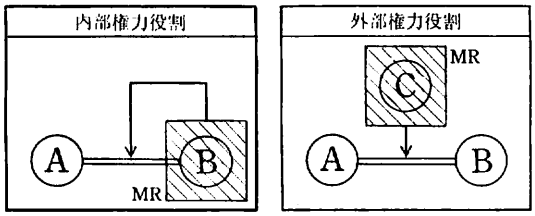

図　I

いはそれを担う行為者）に担われて始めて具現化される「権力」として，理解するのが妥当である[36]。そして，この様な権力を行使する主体が，権力役割の担い手ということになる。

それならば，権力役割とそれが作用する役割関係との位置関係は，二つに分類されるだろう（図 I 参照）。すなわち，当該役割関係（相互作用）内の行為者 (A, B) が権力役割 (MR) を担う場合＝「内部権力役割」と，当該役割関係外の主体 (C) が権力役割 (MR) を担う場合＝「外部権力役割」である。

この様に，権力役割の役割関係における位置を確定することによって，役割関係に直接参与する行為者のみならず，役割関係に影響を及ぼす第三者をも分析対象とすることができるのである。

以上の考察に基づいて，本稿の最終的課題を論じよう。すなわち，「権力役割」概念の「マクロ権力問題」や「ミクロ権力問題」に対する有効性が問われるのであ

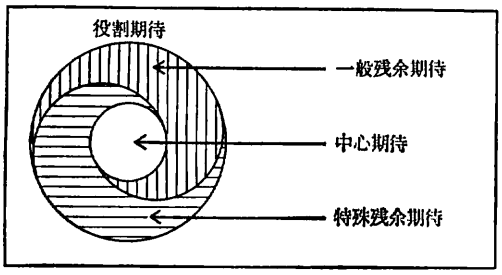

図　　II

る。

まず，役割関係における権力一般の歴史的構造的意味連関を対象とするマクロ権力問題と，個別具体的な役割関係における限定された権力現象を対象とするミクロ権力問題の境界を明らかにするために，役割行動(役割)を構成する期待を「中心期待」と「残余期待」の二つに分類し[87]，対象とされる権力現象の位置づけを確定しよう。

ここでは，社会的相互作用を通じて，それに参与する諸行為者が創発的に形成し相互志向的に抱く規範的な観念として，役割期待を定義する[88]。

中心期待とは，明確に言語化され制度化された役割期待を意味する。

残余期待とは，中心期待を充足する際の程度や仕方あるいは態度に関する役割期待を意味する。残余期待は又，社会的に自明化してしまい言語化されていない「一般残余期待」と個別具体的な行為者間で独自に形成される「特殊残余期待」に分類される(図II参照)。

例えば，会社訪問における面接という相互作用を考えてみよう。面接官（人事部社員）と受験者（学生）という役割関係において，人事規約に従った正当な評価や判定の要請は，中心期待であり，丁寧な言葉使いやリクルートスタイルの要請は，一般残余期待である。受験者が，面接官と同郷であるとか同じ大学の卒業者であるゆえに，特別の配慮を期待したなら，それが特殊残余期待である。但し，これら三つの役割期待相互の関係は固定的ではなく流動的である。

中心期待と一般残余期待を通して具現化される権力関係に焦点を置くのが，マクロ権力問題であり，特殊残余期待を通して具現化される権力関係に焦点を置くのが，ミクロ権力問題である[89]。

まず，マクロ権力問題に対処するためには，中心期待や一般残余期待によって構成された役割関係（役割）のなかで対象化される権力役割を確定する必要があり，その次に，その権力役割の基盤を構造的連関において明確にする必要がある。この課題を解く糸口を，Claessens は，Norbert Elias が提出した「社会的勢力 (die gesellschaftliche Kräfte)」概念に求めている。彼によれば，社会的勢力とは，他者の依存性をもたらす又はもたらしうるモノに関する処分力の所有として定義される[40]。この社会的勢力の有無が，権力役割の有無につながるものと考えられている。すると，他者の依存性に支配的な影響を与える(精神的，物質的)事物の内容は，社会システムの時間的空間的変遷に伴って変化するのだから，役割関係(役割)⟷権力役割⟷社会的勢力⟷社会システムの動態的な相互連関を，個別具体的な相互作用の中で考察することにより，これら四つの要素の歴史的空間的な相対性や変異性が，視野に収められるのではないだろうか。

一方，Claessens の「権力役割」概念は，役割関係に参与する行為者間の個別具体的な現象（気分，愛憎，偏見，差別 e.t.c）によって，一方的独占的に特殊残余期待が規定されていくミクロ権力問題という事態を対象とすることができるであろうか。否である。なぜなら，彼の権力様式類型が権力をシステムとの関連性において理解するために，システムとの直接的関連を検証できない権力，いわば「気まぐれ権力」等の日常瑣末的な権力現象が除外されてしまうからである。従って，三つの権力様式では捉えきれない残滓的権力現象を，第四の権力様式「システム外の権力 (die Macht außer dem System)」として把握する必要があるだろう。これによって，特殊残余期待の規定に際して，気まぐれや具体的行為者間で初めて意味付与される個人的属性[41]が無視できない影響力を持つ場合，それを権力役割として認識することができる。すなわち，役割分析の対象として認識できるのである。

以上の考察から，「権力役割」概念を役割理論に導入することによって，二つの権力問題に対する有効な分析視角が獲得されたと，結論づけてもいいだろう。そして同時に，Dahrendorf の「問題性」をも自覚した役割理論は，現状維持的保守的性格だという批判を克服し，社会批判的視野を獲得するのである。

日常生活という社会的相互作用は，様々な人間的葛藤や闘争を生み出す。そしてその背後には多種多様の権力現象が潜んでいる。役割理論は批判的視野を獲得することによって，これらの社会現象を抽象的レベルから具体的レベルにわたって記述，説明することのできる社会学思考となりえたのである。

注.

1). Dahrendorf, R. Homo Sociologicus, KZfSS 10. Heft 2, 3. 1958. 本稿で参照したのは単行本〔参考文献4〕

2). Joas〔16〕S. 18.

3). 佐藤〔22〕, 古谷野〔17〕, 山口〔31〕参照。

4). SF モデルに対しては，それが「過剰に社会化された人間観 (the oversocialized conception of man)」を前提として構成され，個人の主体性が無視されているという批判, Wrong〔30〕。あるいは，このモデルが「統合定理 (Integrationstheorem)」＝期待や行為の制度的相補性は，行為者の欲求充足の相互性に呼応する，「同一性定理 (Identitätstheorem)」＝安定的相互作用に参与する行為者間には，役割定義と役割解釈との一致が成立する，「同調性定理 (Konformitätstheorem)」＝制度化された価値志向は内面化された価値に呼応する，という三つの定理を前提としており，各定理に対置されるべき「抑圧定理 (Repressions theorem)」，「非同一性定理 (Diskrepanztheorem)」，「役割距離 (Rollendistanz)」を無視せざるをえないという批判, Habermas〔12〕S. 124-127がある。

SI モデルに対しては，まずこの流派一般に向けられるものとして，a)「主我(I)」や「解釈過程 (process of interpretation)」等の人間の主体性形成の契機となる概念の不明確性，b)「一般化された他者 (generalized other)」の主観化を通して生れる「客我 (Me)」概念の不明確性，c) 構造的視野の欠如，d) ミクロ状況それ自体の客観的把握不足，e) 科学的方法としての未成熟，等の批判が挙げられる，船津〔7〕S. 268-275。役割理論に限定した場合には，「役割取得 (role-taking)」，「役割形成 (role-making)」，「役割行動 (role-playing, role enactment)」などの内的構造やメカニズムあるいはそれら相互の動態的な関係についての考察が不十分である，という批判が代表的である。岡部〔18〕S. 45-71。

5). 渡辺〔27〕は，分析的相互開放性の中で，二つの潮流に基づく両理論を相互に各々の弱点を補完するものとして収斂させたモデルを呈示している。

6). SF に対するこの種の批判は多数であるが，代表的なものに Gouldner〔10〕がある。SI に対する批判としては，Huber〔14〕参照。

7). 渡辺〔27〕モデルでは，役割行動に至るまでの，役割期待と役割観念との間の交渉過程において，権力関係が影響力を持つことが指摘されているが，そこで対象とされている権力概念は，システム内の社会的地位関係に結晶化されたそれであり，SF の狭いつ性を脱しえていない。S. 107-112

8). Habermas〔11〕S. 174. Habermas のこの批判は，役割理論が市民社会（資本主義社会）の特殊性を超歴史的な普遍性へと様式化してしまうブルジョワ社会学である，という正統的マルクス主義からの批判と軌を一にする。しかし最近では DDR を中心として，役割概念を体制にとっての機能としての行為期待に限定することによって，ブルジョワ社会学の主観主義を克服して，役割理論を「客観的」なマルクス主義社会理論に包摂しようという試みがなされている，Vorwerg〔26〕参照。正統的マルクス主義による役割理論の受容が，SF と原理的にアイデンティファイするという事態は，現代社会を考察する上で興味深い皮肉である。

9). 本来ミクロ状況を主たる分析領域とする SI が，何故ミクロ権力問題に対して効果的でないかは，注 39)，あるいは船津〔7〕S. 198-204, S. 268-275 参照。

10). 以下 Dahrendorf〔4〕参照。

11). 例えば，佐藤〔22〕，古谷野〔17〕参照。とりわけ古谷野は，homo sociologicus モデルが「個人の属性」から明確に切り離されている点を評価し，有効な社会学的説明理論の構築にとっては，homo sociologicus が SF や SI に対して優越するとしている。〔17〕S. 80.

12). Dahrendorf〔4〕S. 26.

13). Haug〔13〕S. 17-21.

14). Dahrendorf〔4〕S. 58.

15). Haug〔13〕S. 27-35.

16). Plessner〔20〕S. 105.

17). Plessner〔20〕S. 113.

18). Plessner〔21〕S. 16.

19). Dahrendorf〔4〕S. 84.

20). Gehlen〔9〕S. 371. Dahrendorf の政治性を批判する Gehlen だが，彼自身が「価値中立」のイデオロギー性を自覚克服しているとは言い難い。特に次の発言はすぐれて政治的イデオロギー的である。「科学者に求められねばならないことは，彼がある所与の社会の中で生活し，その秩序と政治原理を承認し，それに対して扇動的にならない，ということである。」〔9〕S. 370.

21). Tenbruck〔24〕S. 14.

22). Dahrendorf〔4〕S. 18.

23). Dahrendorf〔4〕S. 43.

24). Dahrendorf〔4〕S. 81.

25). Dahrendorf〔4〕S. 58.

26). Dahrendorf〔4〕S. 35.

27). 彼は規範性と最も深く関係する強制期待の中に肯定的サンクションを認めていない。義務期待においても否定的サンクションを決定的に重視している。〔4〕S. 39.

28). この「問題性」は，Hegel-Feuerbach-Marx 系列のドイツ社会思想に特有な問題意識の役割理論における焼き直しと言えるだろう。

29). Dahrendorf の社会認識における強制，疎外等は，社会的位置の占有とその占有者への社会的に定義された規範的期待に基づいている。それゆえ役割分配と役割期待の形成過程に作用する権力関係を主題化することが要請される。

30). Claessens〔2〕S. 278.

31). Weber〔28〕S. 28.

32). Claessens〔3〕S. 62.

33). Claessens〔3〕S. 63.

34). Claessens〔3〕S. 60. この三つの権力様式は(その

正当性が承認された場合には)，Weber の三つの支配類型：合法的支配，伝統的支配，カリスマ的支配に重なるだろう。

35). Claessens〔3〕S. 146. 秩序との関連で言えば，この定義より権力役割は，既存秩序維持のために役割期待を自己防衛的に維持するという側面とともに，既存秩序突破のために役割期待をシステム否定的に再定義するという側面を持つ。

36). Machtrolle の訳語として，「役割権力」の方が「権力役割」よりも意味上は適切だろう。

37). Scheff〔23〕は，精神病という逸脱カテゴリーへの帰属が，自明視され明確には言語化されていない規範＝「残余ルール (residual rule)」の違反に対する社会的反作用に基づくとしている。私の分類は彼のコンセプトを応用したが，Scheff の「残余ルール」が社会文化的に制度化した規範のみを意味するのに対して，私は「残余期待」の中に個別具体的な行為者間に発生する創発的な制度化されていない特殊期待も含める。Weinstock〔29〕は役割要素の中で，厳密な職業上の要請としての「中心要素 (central elements)」と，それ以外の制度的に要請される社会的局面である「周辺要素 (peripheral elements)」に分類しているが，それは SF の観点よりなされたものである。

38). 社会構造分析でなく，人間関係分析を目標とする役割概念にとって，「社会的位置」は不可欠な定義構成要素ではなく，試行的な役割形成に作用する一要素にすぎない。

39). SI は役割の主観主義的構成を原理とするので，役割を複数行為者間の具体的な相互作用の中で生成する役割関係として把握できない。従って役割取得や役割形成を通じて現実化される役割行動の中に，「一般化されない他者」＝個別具体的な他者の影響（ミクロ権力問題）を見い出せない。

40). Claessens〔3〕S. 60ff.

41). 例えば，女性が，与えられた職務を，女性(個人的)属性）であるゆえに男性（一般）以上に果そうとする場合。スティグマを持った人〔Erving Goffman〕や薬物常習者〔Howard S. Becker〕あるいは同性愛者〔Edwin M. Schur〕が，自己のアイデンティティを隠そうするのは，彼らの個人的属性が，相互作用の相手に権力役割を担うチャンスを与えてしまうからだと言えよう。

参考文献

1 CLAESSENS, DIETER. ROLLE UND VERANTWORTUNG: SOZIALE WELT 14 1963 S. 1-13

2 CLAESSENS, DIETER. ROLLENTHEORIE ALS BILDUNGSBÜRGERLICHE VERSCHLEIERUNGSIDEOLOGIE: T.W. ADORNO (hrsg.) SPÄTKAPITALISMUS ODER INDUSTRIEGESELLSCHAFT ? STUTTGART 1969 S. 270-279

3 CLAESSENS, DIETER. ROLLE UND MACHT. MÜNCHEN 1974 (1968)

4 DAHRENDORF, RALF. HOMO SOCIOLOGICUS, EIN VERSUCH ZUR GESCHICHITE, BEDEUTUNG UND KRITIK DER KATEGORIE DER SOZIALEN ROLLE. KÖLN/OPLADEN 1977 (1964)

5 DREITZEL, HANS PETER. DIE GESELLSCHAFTLICHEN LEIDEN UND DAS LEIDEN AN DER GESELLSCHAFT, VORSTUDIEN ZU EINER PATHOLOGIE DES ROLLENVERHALTENS. STUTTGART 1980 (1968)

6 DREITZEL, HANS PETER. SOZIALE ROLLE UND POLITISCHE EMANZIPATION, SECHS THESEN GEGEN PETER FURTHS MELANCHOLISCHE KRITIK AM ROLLENBEGRIFF: DAS ARGUMENT 71 1972 S. 110-129

7 船津 衛，シンボリック相互作用論，恒星社厚生閣，1980 (1976)

8 FURTH, PETER. NACHTRÄGLICHE WARNUNG VOR DEM ROLLENBEGRIFF: DAS ARGUMENT 66 1971 S. 494-522

9 GEHLEN, ARNOLD. HOMO SOCIOLOGICUS (REZENSION) : ZEITSCHRIFT FÜR DIE GESAMTE SOZIALWISSENSCHAFT 117 1961

10 GOULDNER, ALVIN W. ANTI-MINOTAUR, THE MYTH OF A VALUE-FREE SOCIOLOGY: I. L. HOROWITZ (hrsg.) THE NEW SOCIOLOGY. NEW YORK 1964 (1961)

11 HABERMAS, JÜRGEN. THEORIE UND PRAXIS. NEUWIED/BERLIN 1969 (1963) S. 173ff.

12 HABERMAS, JÜRGEN. KULTUR UND KRITIK. FRANKFURT 1977 (1973)

13 HAUG, FRIGGA. KRITIK DER ROLLENTHEORIE UND IHRER ANWENDUNG IN DER BÜRGERLICHEN DEUTSCHEN SOZIOLOGIE. FRANKFURT 1972

14 HUBER, JOAN. SYMBOLIC INTERACTION AS A PRAGMATIC PERSPECTIVE, THE BIAS OF EMERGENT THEORY: A. S. R. 38 1973 S. 274-284

15 JANOSKA-BENDLE, JUDITH. PROBLEME DER FREIHEIT IN DER ROLLENANALYSE : K. Z. f. S. S. 14 1962 S. 459-475

16 JOAS, HANS. DIE GEGENWÄRTIGE LAGE DER SOZIOLOGISCHEN ROLLENTHEORIE. WIESBADEN 1978 (1973)

17 古谷野亘，役割概念の系譜と問題点：応用社会学研究 21 1980. S. 63-84.

18 岡部慶三，社会的行動の理論：社会的行動（今日の社会心理学 2.） 培風館 1969.

19 PARSONS, TALCOTT. THE SOCIAL SYSTEM. LONDON 1951 (佐藤勉訳，青木書店 1974)

20 PLESSNER, HELMUTH. SOZIALE ROLLE UND MENSCHLICHE NATUR: DERS. DIESSEITS DER UTOPIE. DÜSSELDORF/KÖLN

1966
21 PLESSNER, HELMUTH. PHILOSOPHISCHE ASPEKTE DER ROLLE DES EINZELNEN IN DER MODERNEN GESELLSCHAFT : UNIVERSITAS 35 1980 S. 11-16
22 佐藤 勉，役割理論：基礎社会学 第II巻 東洋経済新報社 1981
23 SCHEFF, THOMAS J. BEING MENTALLY ILL. CHICAGO 1966
(市川孝一，真田孝昭訳 誠信書房 1979)
24 TENBRUCK, FRIEDRICH H. ZUR DEUTSCHEN REZEPTION DER ROLLENTHEORIE: K. Z. f. S. S. 13 1961 S. 1-40
25 TURNER, RALPH H. ROLE-TAKING, ROLE-STANDPOINT, AND REFERENCE-GROUP BEHAVIOR : A. J. S. 61 1955/56 S. 316-328
26 VORWERG, MANFRED. GRUNDGEDANKEN ZU EINER THEORIE DER SOZIALROLLE IM "KAPITAL" VON KARL MARX : GEORG MENDE/E. LANGE (hrsg.) DIE AKTUELLE PHILOSOPHISCHE BEDEUTUNG DES "KAPITAL" VON KARL MARX. BERLIN (DDR) 1968 S. 160-164
27 渡辺秀樹 個人・役割・社会—役割概念の統合をめざして—：思想 686. 1981. S. 98-121
28 WEBER, MAX. WIRTSCHAFT UND GESELLSCHAFT. TÜBINGEN 1980 (5. Aufl.)
29 WEINSTOCK, S. ALEXANDER. ROLE ELEMENTS, A LINK BETWEEN ACCULTURATION AND OCCUPATIONAL STATUS : B. J. S. 14 1963 S. 144-149
30 WRONG, DENNIS H. THE OVERSOCIALIZED CONCEPTION OF MAN IN MODERN SOCIOLOGY : A. S. R. 26 1961 S. 183-193
31 山口節郎，社会学と役割理論：エピステーメー 1-2 1975 S. 136-147